

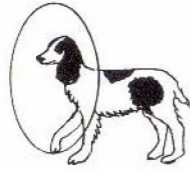
熊本県自主文化事業

みどりの周波数

RKK

熊本放送

熊本市山崎町30 TEL 328-5511 (受付案内)



くまもとを、
一番良く知っています。

くまもとを、見る。聞く。話す。
RKKは、くまもとの、
その日のこと明日の動きを、
いち早くお茶の間にお届けします。
皆さまの信頼を電波にのせて
今日も、夢を、大空へ。RKKです。

ベートーヴェン
第九
第7回

昭和63年12月25日(日)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催：熊本県・県民第九の会・県文化協会



熊本県知事
細川護熙

慌しい年の瀬を迎え、今年もまた「第九」の季節がやってまいりました。

熊本県立劇場完成を機に誕生いたしました「県民第九の会」によりますベートーヴェン「第九」の演奏会も、今年で7回目を迎えることになったわけです。

年末の「第九」に燃えるアマチュア音楽家たちは日本国中に溢れ、「第九」を歌う県民や市民の会も年々増えつつありますが、そういった状況の中で熊本の「県民第九の会」は、熱心な指導者とメンバーの方々、それから会の運営を陰で支えていらっしゃる実行委員の皆さんのご苦勞によって、着実に成長してまいりました。

またソリストとして今回お迎えした中で、ソプラノの三縄みどりさんと木村宏子さんは、熊本のご出身で現在東京を中心に活躍なさっています。

近い将来、ソリストや指揮者を含めて熊本県民だけによるレベルの高い「第九」を開催することも決して夢ではないように思えますが、それぞれ「県民第九の会」の理想の姿ではないでしょうか。

その理想への第一歩として、今年を締めくくる素晴らしい演奏会が開催されますことを祈念してご挨拶の言葉といたします。



熊本県文化協会会長
岩下雄二

県文化協会は県下の各文化団体と協力して、年間を通じ数多くの文化行事を行っている。先般は八代市に於て第1回県民文化祭を開催して、成功を納めたのであるが、第九の演奏会もそうした行事の1つであり、その年の最後を飾るものである。

県立劇場の完成を祝って始まったこの演奏会は今年で第7回を迎える。出演者は管弦楽も合唱団もすべて熊本県民であり、県下各地から集まって9月以来熱心な練習を続けた成果が本日の演奏である。4人の独唱者の中で、お2人は本県出身者であるそうで、まさに県民の力を結集した演奏会と言えよう。

この時季には全国各地で、多くの第九演奏会が開催されるそうであるが、その中でも熊本の第九は水準が高い、と評価されるような演奏をして貰いたいものである。その高さが熊本の文化の水準を示すものとする。聴衆の皆様にも温いご声援をお願い申し上げたい。



県民第九の会実行委員長
有馬俊一

おかげ様で第九演奏会は第7回を迎えます。年末に第九を聴きたい、歌いたいという多くの方々に支えられて、これまで続けることが出来ました。心から感謝申し上げる次第です。

指揮は安永武一郎氏、昨年の第九が好評で、是非もう一度という要望が強く出されましたので、固辞される先生にたってお願ひしました。独唱は三縄みどり・木村宏子・鈴木寛一・平野忠彦の4氏、ともに日本一流の方達です。オーケストラの熊本交響楽団、合唱の県民第九の会合唱団、メンバーの中には専門の音楽家もありますが、大部分はアマチュアで、会社員・主婦・学生・教師・医師等他に仕事を持つ人達です。合唱団の募集には熊本市内はもとより、球磨、阿蘇、八代等県内各地から370名の応募がありました。高校生から60才代まで、年令も職業も異なる人達が集まって、声を合わせ心一つにして、ベートーヴェンの傑作に立ち向う、まことに素晴らしいことと思います。合唱団員の $\frac{1}{2}$ は初めて第九を歌う人達です。勿論無理もあれば限界もあります。しかし、私達は努力と熱情と、そして安永先生の卓越したご指導によって、聴く人の心に訴える感動的な演奏にしたいと、9月以来練習を重ねて参りました。未熟な点はご寛容下さいまして、皆様方の温いご声援をお願い申し上げます。

指揮 安永 武一郎

独 唱 ソプラノ 三 繩 みどり
メソソプラノ 木 村 宏 子
テノール 鈴 木 寛 一
バリトン 平 野 忠 彦

合 唱 県民第九の会合唱団

合唱指揮・岩代和武

ピアノ・杉野恵美

管弦楽 熊本交響楽団



昭和62年12月26日〈県民第九の会演奏会（指揮＝安永武一郎）〉から



指揮 安永 武一郎

大正11年長崎県生まれ、福岡で育つ。

東京音楽学校（現、東京芸術大学）を卒業後、再び昭和26年より1年間東京芸術大学に学び、ピアノを水谷達夫、指揮を故金子登、渡辺睦雄、クルトヴエスの各氏に師事する。

昭和31年より九州交響楽団の常任指揮となり、定期演奏、巡回演奏、音楽教室、オペラに活躍し、常任指揮者を連続26年間つとめ、「九響育ての親」といわれ、現在の九響の根幹を築いた。

その間、東京交響楽団、大阪フィルの放送の為の指揮をし、かつ熊本交響楽団、長崎交響楽団をそれぞれ約10年間指揮、豊橋交響楽団の名誉指揮者でもあり、昨年は豊橋市の市制80周年に招かれ、父・武一郎の指揮で子・徹（ベルリンフィル第1コンサートマスター）の親子競演で会場を沸かし、大きな反響を呼んだ。

昭和40年から1年間ウィーンアカデミー指揮科に留学し、スワロフスキーに師事し、トーンキュンストラ（国立オーケストラ）を指揮している。

昭和55年福岡市文化賞を受賞し、現在は、九州交響楽団の名誉指揮者であり、福岡教育大学の学長である。

三縄みどり(みなわ・みどり)

ソプラノ



熊本県出身

東京芸術大学卒業、同大学院オペラ科修了

岩津範和、木村宏子、柴田睦陸、疋田生次郎の各氏に師事。

芸大オペラ、「ラ・ボエーム」のムゼッタ役でデビュー。パルコオペラ、「フィガロの結婚」のサンナ他、「カルメンのミカエラ」、「魔笛」のパパゲーナ、「ヘンゼルとグレーテル」のグレーテル等、演奏会形式で「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオリディリーも歌う。ガッツァニーガというイタリアの作曲家の「ドン・ジョヴァンニ」本邦初演には、ドンナ・エルヴィーラ役で出演。

その他、ベートーヴェン「第九交響曲」、モーツァルト「レクイエム」、「ハ短調ミサ曲」、ヘンデル「メサイヤ」、ブルックナー「テ・デウム」、カール・オルフ「カルミラ・ブラーナ」、フォーレ「レクイエム」等、数多くのソプラノ・ソロを務める。

現在、二期会会員、横浜オペラ会員

木村宏子(きむら・ひろこ)

メゾ・ソプラノ



東京芸術大学卒業。関種子、佐々木成子に師事。

1957年文化放送賞受賞。

1959年「フィガロの結婚」のケルビーノでオペラにデビュー。美しい声と広い音域、豊かな音楽性と表現力を持ち、その後、「椿姫」のフローラ、「ロング・クリスマス・ディナー」(ヒンデミット曲)のジュネヴィエーヴ、「ラインの黄金」のフロースヒルデ及びウォークリンデ、「蝶々夫人」のスキ、「こうもり」のオルロフスキー、「ナクソス島のアリアドネ」(R. シュトラウス)の作曲家、「ファウスト」のジーベルなどを歌っている。

他方コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年から5年間N響の「第九」のソリスソとして連続して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演により、「レクイエム」(モーツァルト・ヴェルディ)、「メサイヤ」(ヘンデル)、「クリスマスオラトリオ」(バッハ)、「変ホ長調ミサ」(シューベルト)他多くの曲を演奏しており、この分野に於ても不可欠の存在となっている。

また'74年の「毎日ソリスステン」と'78年6月に行ったリサイタルでは、ドイツ歌曲の真髄に迫り絶讃をあげている。1982年「ディドとエネアス」の名演奏によりウィナーワールド・オペラ賞を受賞。

二期会会員

鈴木 寛一(すずぎ・かんいち)

テノール



東京芸術大学卒業

林 達次 長坂好子 ロドルフォ・リッチ リリー・コラー 佐々木成子に師事。

「ドン・ジョヴァンニ」オッターピオでオペラ界にデビューし注目を浴びる。その後「お蝶夫人」「セヴィリアの理髪師」「愛の妙薬」「オルフェオ」「魔笛」「こうもり」「夕鶴」「カーリュ・リヴァー」「燃える炉」「春琴抄」「イドメネオ」「ボッペアの戴冠」等のオペラ主役を歌いその演技と歌唱はそれぞれ高い評価を得ている。これらの他にも30曲近いオペラのレパートリーがあり幅の広い演技と歌唱は定評がある。

また一方宗教音楽の分野に於いても不可欠の存在で国内の殆どのオーケストラと共演している。来日する著名指揮者との共演も数多く マタチッチ。スウィトナー。シュタイン。サヴァリッシュ。クワドリ。ウェラー。リリング。レーヴライン。ワルベルク。ライトナー。ヴィンシャーマン。等の指揮で歌っている。

レパートリーも「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「クリスマスオラトリオ」「短調ミサ」「天地創造」「四季」「メサイヤ」「サムソン」「ベルシャザール」「ミサソレムニス」「カルミナ ブラーナ」「エリア」「レクイエム」モーツァルト。ヴェルディ。他「戦争レクイエム」「子供の時代」「千人の交響曲」「第九」等その他数多くのカンタータオラトリオのソロを歌っておりその全てに高い評価を得て オラトリオ歌手として第一人者の地位を保っている。

美しい抒情性に富んだ声で歌う受難曲のエヴァンゲリストは特に定評があり小沢征爾による「マタイ」では絶賛を浴びた。76年には「ボリス・ゴドノフ」のシュイスキーの歌唱と演技でウイナー・ワールドオペラ賞 86年には「マタイ受難曲」「こうもり」のエヴァンゲリスト、アイゼンシュタイン、等の歌唱と演技でジロー・オペラ賞を受賞。77年にはウィーンに於いて研鑽を積んでいる。

二期会会員

東京芸術大学助教授

フェリス女学院短期大学講師

平野 忠彦(ひらの・ただひこ)

バリトン



東京芸術大学卒業。

同大学専攻科修了。畑中良輔に師事。

深みのある柔軟な声を持ち、芸大オペラ「ウインザーの陽気な女房達」のファルスタッフでオペラにデビュー。その後「フィガロの結婚」のフィガロ、「夕鶴」の惣と、「蝶々夫人」のシャープレス、「タンホイザー」のヴォルフラム、「ファルツファル」のアムフォルタス等数多くのオペラに出演。1963年9・10月には清水 脩のオペラ「智選び」のアメリカ公演に参加、さらにその後「椿姫」のジェルモン、「72年には「フィガロの結婚」の伯爵と、団伊玖磨の「ひかりごけ」の船長を、また'73に「カテリーナ・ロイズマイロバ」のボリスを演じている。オペラ以外では'62年二期会オラトリオ公演「天地創造」のラファエロで絶賛をあげた他、「メサイヤ」、「レクイエム」(モーツァルト、フォーレ)、ベートーヴェンの「交響曲第9番」等をレパートリーとし、又ドイツ歌曲、日本歌曲、ミュージカルナンバー等にも造詣を示し、我が国バリトン界を代表する一人となった。1973年12月に文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧、ミラノ、ウィーンを中心に勉強し、'74年12月にニューヨークでジョイントリサイタルを開き帰国。'75年1月毎日ソリスステンのリサイタルで留学の成果を示し、同年「学生王子」のフォン・マーク首相、「カバレリア・ルズティカーナ」のアルフィオ、「ちゃんちき」の狐のとっさま、'76年「タンホイザー」のヴォルフラム、「ボリス・ゴドノフ」のランゴーニ、「77年「フィデリオ」にピツァロ、「78年「ファウスト」のメフィストフェレス、「魔笛」の弁者、「80年「フィガロの結婚」のアルマヴィーヴァ伯爵などを次々に演じる他、オラトリオや歌曲によるコンサートで活躍。なお、「76年度のウィナーワールド・オペラ大賞を受賞。

最近、ミュージカル「くたばれヤンキース」の音楽監督を担当するなどますます活動の幅を広げている。

二期会会員

国立音楽大学講師

東京芸術大学助教授

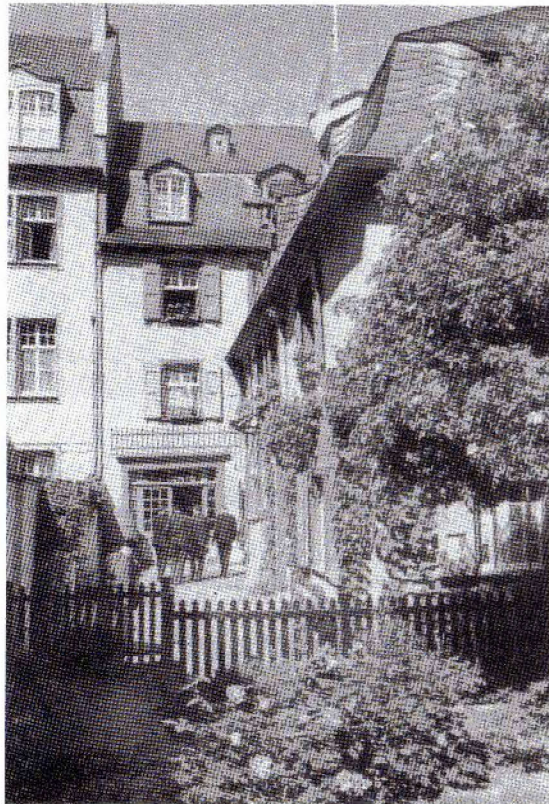
1. 序曲「コリオラン」ハ短調作品62

ベートーヴェン

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125

ベートーヴェン

- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso
第2楽章 Molto vivace
第3楽章 Adagio molto e cantabile
第4楽章 Finale



ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げると、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手にとるようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー＝〈歓喜に寄す〉

対訳＝大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne! Sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, Wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt der stehle
Weinend such aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such'ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

- ① 歓びよ、神々のうろわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
- ② この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

- ③ 大なる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情を勝ち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
- ④ しがかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかった者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

- ⑤ すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
- ⑥ 歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルピムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

- ⑦ 歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
- ⑧ 同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合唱

- ⑨ たがいに取り合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
- ⑩ ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1. 序曲「コリオラン」八短調 作品62 ベートーヴェン

コリオランは紀元前5世紀頃のローマの英雄である。紀元前494年にローマが共和政体になるにおよんで、政治上の意見の相違により、コリオランは、国外追放となる。二年後隣国ヴォルシアの将軍となったコリオランは大軍をひきいて故国ローマを攻める。しかし、城門まで迫ったコリオランは、かれの母ヴォーラムニアと妻ヴァージリアの諫言により、ついにヴォルシア軍に反旗をひるがえし、再びローマ側につく。けれどその結果は謀殺されることになるのである。

ベートーヴェンが序曲「コリオラン」を作曲したのは、1802年、当時ウィーンの宮廷秘書官で詩人のハインリヒ・ヨーゼフ・コリンの戯曲「コリオラン」の上演が直接の動機になっている。ただし、この曲が作曲されたのは1807年であるため、この戯曲の上演のために作曲されたものではない。

ベートーヴェンは、かれのただ一曲のオペラ「フィデリオ」のために序曲を4曲も書いている。その他の序曲は殆んどが劇音楽のものや、バレエ音楽等の序曲であるなかで、この序曲「コリオラン」だけは全くの独立した序曲である。



「第九」の初演でソプラノを歌った
ヘンリエッテ・ゾンターク

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボンのフィッシュェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分を見えながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二楽章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々が入り、そこで陶酔や麻醉へと駆りたてられるからである……」と言っている。

【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことが、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる……」と言っている。

【第四楽章】 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの軟ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストーソとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

(50音順)

有馬 俊一 (実行委員長)	神田 一伸	田北 洋康	藤枝 昭俊
岩代 和武	草刈 秀克	黒葛 原潔	本山 洋
江橋 克己	下田 宰城	林原 隆治	山崎 崇伸

〈コンサートマスター〉

山崎 崇伸

〈1stヴァイオリン〉

東 恭子
阿波 和江
井上 あかね
江頭 和憲
大宮 伸二
桂 敦子
紙本 剛
木崎 珠美
清元 貴子
古泉 晃子
田野 育美
黒葛原 契子
鶴 和美子
豊永 恭子
長坂 浩子
萩原 由美
東 真知子
山崎 崇伸
吉永 誠吾
芳野 真理子

〈2ndヴァイオリン〉

上田 萬二
岡 純子
清永 健介
草野 正夫
桑原 暁子
古閑 文子
小柳 敦子
坂下 真弓
佐藤 弘美
田上 るみ子
谷川 くみ子
中村 裕子
野崎 久美子

野元 明子
野田 和子
平井 隆博
深田 聡二
松崎 浩二
松村 美紀
村田 和穂
本山 洋子
本吉 永裕子

〈ヴィオラ〉

荒木 拓実
緒方 肇晃
清元 晃子
黒木 紀久子
国府 慶作子
甲田 啓子
杉原 由江子
田中 直子
徳永 義治一
野尻 晃一
毎床 一寿司
真野 恵子
松田 教子
水田 剛子
吉田 教子
吉田 美智子
渡辺 精一

〈チェロ〉

石垣 博志
井石 哲也
鈴木 陽子
高浜 秀光
津田 一彦
長尾 和治
長坂 輝喜
槌田 博文
深松 真也

福永 憲包
本田 義信
三浦 純子
水原 真純
山中 朗史

〈コントラバス〉

伊津野 恵子
岩井 和子
古泉 俊彦
国米 稔子
田上 博彦
歳田 和彦
原國 智枝
平川 和秀

〈フルート
ピッコロ〉

緒方 宏明
隈 紀子
山口 邦子

〈オーボエ〉

片岡 久哉
橋 徹
辰野 裕昭
宮本 千草

〈クラリネット〉

黒木 健次
高野 栄次
田中 久美子
保田 明子

〈ファゴット〉

小林 太郎

高木 群之
田畑 博美
蓮沼 昇

〈ホルン〉

後藤 滋之
斉藤 恵之
高橋 毅行
田畑 博行
黒葛原 潔
安松 真司
山口 亮二
吉津 晶子

〈トランペット〉

市原 彰
岩井 宏二郎
堀江 幸司

〈トロンボーン〉

井爪 一宏
田北 洋康
寺本 昌弘

〈打楽器〉

白尾 友宏
杉本 奈穂子
前田 好茂
榎 偶茂

Beethoven's Portraits



ベートーヴェン

1818/19年、フェルディナント・シモン原画によるエドワード・アイヘンスの銅版画。